

あらえびす賞

「風に吹かれて」思ひこ

阿部 和幸

連日戦争のニュースを突きつけられると、「風に吹かれて」が頭をよぎります。ノーベル文学賞を受賞したボブ・ディランの代表作です。60年代のプロテストソングの極めつけです。HOW MANY ？ 疑問文を3つ重ねて、「答えは風の中にある」で終わる、2番、3番も同じ構成です。メロディも歌詞もいたってシンプルな曲です。内容は1番が反戦。2番が反人種差別、3番が反体制と解釈しました。ベトナム戦争、公民権運動のアメリカが背景です。i k k o様流の「どんだけ」が同じメロディでくりかえされるので自然に刷り込まれます。

ビートルズのレット・イット・ビーが世に出るまで、この曲を超えて時代の潮流を変えた曲はないように思います。あるがままに、という自然体に行きつくまでの反抗期のBGM、それが「風に吹かれて」だったのかもしれない。せん。

この曲には気になる点があります。最大の関心事でもありません。それは「答えは風の中にある」という最後のフレーズの意味です。詳しく言えば「答えは風の中で風に吹かれている」です。はぐらかすようなエンディング、3つの疑問文と相まって、「犯人を明かさない推理小説」と批評されたそうです。伏線回収してよ、っていう感じでしょうか。私は「答えは無いわけではなくて、ある。けれど風の中で揺れている。だれも「こうだ」と断定しない、流動的なまま。いつまでこんなことを続けるんだ？」と解釈しました。「このままじゃダメだ。被害者がふえるだけだ。大人たちよ、いい加減にしろ」という若者の叫びだと思えます。戦争に限らず、日本社会にも「このままじゃダメだ」はたくさんあります。私の世代が、現役世代でいるうちにこの叫びをぶつけられるべきだった、とも思えます。そうすれば「失われた30年」はもう少し短かったかもしれません。

次に感心した点。婉曲な表現、和歌を連想させる巧みな例えです。二十歳過ぎの若者が書いた詞とは思えません。反抗でありながら冷静に遠回しに聞

## 審査員講評

あらえびす賞感想文について

この曲で2016年に歌手として初めてノーベル文学賞を受賞したボブ・ディラン。歳月は流れましたが、肩肘張らない歌い回しで人々に訴えようとしたことが、昨今より一層重い意味を持っていることに気付かせてくれました。

く人の心に染み込むような表現、見事です。このあたりがノーベル文学賞に値するのでは、という気がします。ボブ・ディランの人柄がそうさせたのか、歌えない事態に追い込まれては困るので防衛策として意図的に婉曲な表現を使ったのか、私は両方だと思えます。人柄と才能の為せる技でしょう。そしてアメリカ人にも婉曲な表現が受け入れられることにも驚きました。映画「マディソン郡の橋」と同じ驚きです。私の偏見なのでしょう。アメリカ人はストレートで行間を読むような繊細なこととはしない、とは限らない。何せ、世界中から移民が来てますからね。いろんなことをおしえてくれる曲です。冒頭に「戦争のニュースでこの曲を思い出す」と書きましたが、ウクライナやパレスチナの報道時、BGMとしてこの曲が流れないのが残念です。残念と思いつきながら見ているうちに、こんなことを思いつきました。戦場にこの曲をながしたらどうだろう。夜、敵軍の兵士が眠りにつく頃に。壁にこの歌詞を書いたらどうだろう。歌詞を聞いたビラをばらまいたらどうだろう。終戦は政治的決着しかないでしょうが、停戦は文化的手段でも効果はありえるのかも？ここまで書いて「リリー・マルレーン」を思い出しました。というより、戦場にリリー・マルレーンという曲を流したら兵士たちが敵も味方も同様に聞いていたという第一次大戦中のエピソードが刷り込まれていたからこんなことを思いついたのでしょう。兵士の共感から停戦へ、武器でなく文化で。そんなことを考えさせる曲です。学生街の喫茶店の片隅できいていたボブ・ディラン、なかなかの人です。

曲名 風に吹かれて  
作詞・作曲 ボブ・ディラン

## 教育長賞

### 愛の育て方

東京女子大学 1年 萩谷 咲音子

私は「サボテン」という曲が大好きだ。大好きなバンド・緑黄色社会を知った五年前、友達に薦められて買ったCDがきっかけである。今や、*Mein*など王道のポップロックを突き進んでいる彼女たちのメジャーデビュー曲を含んだ六曲のミニアルバムを手にとった。

「ごめんね 私はサボテンさえ上手く育てられずにやりすぎた水が溢れていったよ」というフレーズで始まるこの曲を最後まで通して聴いてみると一見ありふれた失恋ソングのように思う。好きな人への愛が溢れすぎて一度は重なり合った想いがずれてしまい、別れる選択をした主人公の後悔がメインで描かれているからだ。だが、少し視点を変えてみると誰もが一度は抱いたことのある「愛」について考えさせられる曲だとも捉えることができる。恋人、友達、家族といった名前のある関係性も、一くくりにこれといった名前の定まらない、名前のない関係性にも形は違えど「愛」は存在する。この曲の神髄は作詞家長屋晴子の、サボテンに水をあげなすぎで枯らしてしまっただという実体験から着想を得た、すべての人にあてはまる愛の行方にあると考える。

サボテンは観葉植物で、水をやらなくても育つことから植物を育て始める初心者向きだとされている。しかし水をやらなくても育つというのは、他の植物と比べてというニュアンスが含まれるのであって、水なしで育てるのは難しい。適切な量、丁度良さが求められているのだ。これはサボテンに限った話ではなく、他の植物を育てるときのみならず、人間関係においても通ずる部分がある。水をやりすぎて枯らすことがあるように、愛情が深ければ深いほど素敵な関係性を築けるわけではないのだ。自分と相手との気持ちのバランスが大切に、丁度良さを求められている。では、丁度良さとはいったい何であろうか。

「丁度良い」「適切」といった言葉を私たちはよく使う。良いバランスを保つこと、適切な答えを導くことが求められているが、人間関係において、

正解など存在しない。その人にとっての正解、基準があってそこからとび出たら出番はもうない。何かに熱中するような、対モノの関係とは違って人間は生ものであるのでもうしても自分のものさしで測ってしまうのだ。私にも私なりの、相手には相手なりの考えや基準があって、それが合わないことも多い。そんな人間関係における合う合わないを経験し、想いが溢れて止まらなくなってしまうた主人公の行く先は最後の、「いつかいつか私の愛の花を咲かせよう」なのである。私の経験上、愛が溢れて枯らしてしまったことはないが、枯らしかけたことはある。大切な人だから嫌われたくない気持ちが勝り、本音をいうのが怖くなったり、ダメな自分を見られて幻滅されたらどうしようと思ったりと大事に想っているからこそその気持ちが前に出てきてしまった。その結果、言葉数が少ないことが発端ですれ違ふようになったが、お手紙で自分も相手も気持ちの整理をつけて心の声と向き合えた。中学卒業以来、ずっと大切な親友である。

「サボテン」が教えてくれたのは、自分と相手の本当の気持ちに向き合うことの大切さや嫌われてしまった後の後悔と回想から得る学びである。現に私は「いつか」花を咲かせるのではなくその当時、失いたくないと思った今咲かせようと思って動くことができた。枯れきる前に再び咲かすことができるといった背中を押してくれた曲でもあるのだ。ただキラキラした応援ソング、プラスの言葉や明るい曲調の歌ではなく、暮らしに寄り添った音楽が軸ながら、キレイごとではなく苦しみのある曲だから美しいと思う。人生は成功も失敗も同じくらいある。生まれてから一度も失敗したことのない人などいないと思う。勉強、運動といったものさしで測れるものから人間関係のよいうな正しさが人それぞれのもので幅広い失敗があるからだ。失敗してしまつたとき受け入れ難いと思うことも、落ちこむこともあるだろう。しかし、そこから何を得るのか、学ぶのかといったその後が重要だと考える。同じ失敗を繰り返さないためにどうすべきか、花を咲かすのか否かというのは自分次第ということを教えてくれていると思う。失恋というより、人生の中の失敗すべてにおいて、その経験があつてこそ今の自分だと思えるよう「必ず無駄にはしない」「花を咲かせよう」と自分自身を鼓舞してくれる歌だと気づかされた。何か起きてしまったことは変えられないが、その後どう動くか

によって結果を変えられるかもしれない。何度も経験を重ねて「丁度良さ」  
「適量」を身につけていくのだ。今この瞬間をどう生きるか、後悔だけで終  
わらないところがこの曲の魅力だ。枯れきる前に、枯らしてしまったから終  
は、と考える人がたくさんいることを願う。

曲名 サボテン  
作詞・作曲 長屋 晴子



## 優秀賞

聴くたびに決意を新たに

細江 隆一

「真っ白な雪道に春風香る

わたしはなつかしい

あの街を思い出す」

初めて聴いたのは、地元の少年少女合唱団のコンサートだった。知り合いに誘われて参加したそれだが、「子ども達がかわいいからぜひ」と言われ、子ども好きとしては参加せざるを得なくなった。せっかくだからと、家族と共に参加したコンサートだった。

コンサートでは、様々な曲が流れた。集まった人たちが老若男女だったので、その配慮だろう。どの年代の人たちも楽しめるよう、童謡から最新のポップスまで、幅広いジャンルをカバーしていた。

そのコンサートの最後が「花は咲く」だった。正直、私はこの曲を全く知らなかった。曲の紹介で「東日本大震災後に作られた曲」と知り、俄然興味を持ったのだった。

初めて聴いた感想は、「なんて胸に響く曲だろう」だった。東日本大震災では、たくさんの人たちが亡くなられた。私も映像で観たが、津波によって流されていく建物、車、動物、そして人。衝撃だった。

できればこれは映画のワンシーンであって欲しい。

あるいは、クリエイターの手によって作られたユーチューブの動画であって欲しい。

そんな思いを抱いたのは私だけではなかったはずだ。

あの震災の日、私は仕事をしていた。ぐらっと来て、どきっとした。当時の職場は山の上に建っていたので、揺れがすごかったのだ。慌ててデスクの下に隠れ、身体を守った。私だけでなく、他の人たちもみんな。

しばらく揺れが続くと、それっきり揺れは収まった。デスクの下から這い出すと、口々に言った。

「ああ、いつもよりちょっとだけすごい地震だったな。」

「確かに。でも、収まって良かった。」

その直後だ。ニュースを観たのは。津波が到来する前の、崩壊し、燃えさかる建物や、逃げ惑う人たちの映像を観たのは。あの日「なつかしいあの街」は、一瞬にして消えてしまったのだった。

福島県には大学時代の親友がいた。私はすぐさまコールした。なのに、電話は一向に繋がらなかった。コールはしても繋がらないのである。

「もしか、あいつまでこの地震の犠牲になったのでは。」

そう思い込むと、想像が膨らみ、いてもたってもいられなくなった。私は一〇分ごとにコールをしたが、それでも繋がらなかった。後で知ったのだが、どの電話も回線が混線していて、みんな同じ状況だったらしい。

幸い、五日後に彼とは電話が繋がった。無事で良かったと安堵した。被害はないのかと聞けば、自宅の壁にひび割れが入り、瓦が幾つか落ちて割れた程度で、家族は全員無事だと言う。五日間張りつめた雰囲気の中で生活していたので、一気に緊張の糸が切れた。

ただ、一方で「叶えたい夢もあった」「変わりたい自分もいた」人たちが大勢生命を断たれてしまったのは事実だ。今でも覚えているのは、少女が海に向かって叫ぶ映像。たまたまニュースで観たのだが、恐らく中学生の彼女が「おかーさん」と叫んでいた。

きっと母親は海に流されてしまったのだろう。生きてるか否かもわからないのだが、彼女は「おかーさん」と叫ぶことで自分を保っていたのだろう。きっと同じ立場だったら、私も同じことをしたに違いない。そうしないと、精神が崩壊してしまうだろうから。「おかーさん」と叫ぶ彼女が、その後どうなったのかわからないが、あのシーンを何度も夢に見たのは、それだけ印象的だった証拠である。

合唱団が歌った「花は咲く」を、帰宅してから動画で観た。様々なアーティストが、代わる代わる歌っている動画があった。必ずしも歌が上手い人ばかりではない。なのに、聴いていると、じーんとくる。東日本大震災で亡くなられた人たちへの鎮魂歌。何時しか涙していた。

「花は咲く」は、全国各地で合唱曲として歌われている。動画にも幾つかの学校の様子があった。聴けば聴くほど胸を打たれるのは、思いがそこにあ

るからだろう。「震災遺児」でなくとも、震災で大切な人を失った人たちの  
思いを乗せれば、聞く人の胸を打つ合唱になりえる。「花は咲く」を口ずさ  
むたび、それを感じている。

東日本大震災の跡には確かに花が咲いていた。津波の跡にも、原発事故で  
人がいなくなった土地にも。今もきつと季節の花々を咲かせているだろう。  
「花は咲く」を聴くたびに想像している。

曲名 花は咲く  
作曲 菅野 よう子  
作詞 岩井 俊一

